令和5年度

教育研究所事業報告

四万十町教育研究所

１．教育研究活動（研究員の調査研究テーマ）

四万十町 ICT 教育推進計画の実践と検証

～ICT を活用した「主体的・対話的で深い学び」につながる授業～

研究員　　武政　仁美

【テーマ設定の理由】

本町においても GIGA スクール構想を受け、児童・生徒の学びの質を高めるため、一人ひとりの学習状況に応じ、学習目標を達成する上でより効果的な手段として、１人１台端末の環境が整った。学習指導要領では、各教科等の指導を通じて育成を目指す資質・能力が「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の３つの柱で整理され、実現に向けて主体的・対話的で深い学びを授業の中で展開し、さらには、この深い学びにつなげるための能力の一つとして情報活用能力を育成することが求められている。

このことから、もはやスタンダードである１人１台端末などの ICT 機器の有効活用を図り、多様な子どもたちを誰一人取り残すことのない公正に個別最適化された学びや創造性を育む学びを積極的に推進するため、「四万十町 ICT 教育推進計画」に掲げる基本的な方針・目標の実現を目指し、上記のテーマを設定した。

【調査研究の概要】

○四万十町 ICT 教育推進計画に基づき、「主体的・対話的で深い学び」に向かうための ICT の効果的な活用方法について検証と授業実践を行う。

○先進的な取り組みや実践例の情報を収集し、各校での取り組みに生かせるように情報提供を行う。

○学校教育課担当者や関係機関と連携し、教員の ICT 活用指導能力の向上に向けて提案や情報発信を行う。

【成果○と課題◆】

○町内の ICT を活用している実践例を集め、情報教育担当者会で発表したり研究所便りの中で情報提供したりすることができた。

○ICT 活用指導能力の向上のため、オンライン研修等に積極的に参加し、そこで学んだことを活かして授業で実践することができた。

○本年度より小学５、６年の算数と外国語、中学１、２、３年の数学と英語が導入されている学習者用デジタル教科書の活用について実態を調査し、活用のための講習会を開催した。またその中で特に効果的な活用ができると考えたデジタルコンテンツを使用した授業を行った。

○来年度から導入するデジタルドリルの選定に向けて、他の市町村からの情報も収集し、方向性を決めることができた。

◆ICT を活用した授業を行い、児童生徒の学習に対する意欲や興味・関心を高めることや、試行錯誤しながら考えることができるなどの効果を感じることはできたが、「主体的・対話的で深い学び」につながる授業を展開できたかを検証するまでに至らなかった。

◆町内では学校や教員によって ICT の活用状況に差があるという実態があるが、ＩＣＴの効果的な

活用を進めるための提案授業等を行うことはできなかった。
◆ＩＣＴ教育推進チームの一員であったが、本年度はタブレットドリルの選定に向けた話し合いが主となり、ＩＣＴの利活用に向けた対策を検討することが十分にできなかった。

＜ICT に係る研修及び学校訪問＞

5／18	オンライン	ロイロオンライン研修（はじめてのロイロノート）
6／7	窪川中	ロイロノートを使った理科の授業参観
6／9	仁井田小	ICT活用状況見学（朝の時間、児童集会）
6／14	窪川小	キュビナ導入デモ
6／15	オンライン	ロイロオンライン研修（教材・プレゼンを作ろう）
6／20	七里小	授業参観（ロイロノートを使った振り返り）
6／22	オンライン	ロイロオンライン研修（共有ノートで協同学習）
6／27	窪川小	ベネッセみらいシード導入デモ
6／28	影野小	校内研参加（ロイロノート思考ツールを活用した国語の授業6年）
6／30	オンライン	情報教育担当者会（ICT 活用事例報告）
7／6	影野小	校内研参加（ロイロノートを活用した国語の授業２年）
7／28	オンライン（東又小）	小学校 ICT スキルアップ研修会
8／21	教育センター	令和5年度新しい時代の ICT を活用した学びフォーラム
9／6	米奥小	校内研参加（プログラミングの授業参観とロイロノート活用研修会）
9／7	東又小	ロイロノートを使った授業（3年）
9／14	久礼小	タブレット（クラスルーム）を活用した体育の授業参観
10／5	東又小	ロイロノートを使った授業（2年）
10／16	四万十町役場	デジタル教科書（算数）活用研修（講師：東京書籍高橋さん）
11／16	オンライン	ロイロオンライン研修（小テスト・アンケートを作ろう）
11／30	オンライン	学校 DX 戦略アドバイザー事業オンライン研修（端末の活用！授業で、授業外でこんな工夫！しています）
12／4	東又小	学習者用デジタル教科書を活用した授業（5年算数）
12／4	オンライン	リーディング DX スクール事業公開学習会（学校全体で取り組む GIGA 端末の活用とその工夫）
12／11～12／20	米奥小	学習者用デジタル教科書を活用した授業（5年算数）
1／10	オンライン	令和5年度 ICT を活用した秋田の教育力向上事業「オンライン・ミーティング」
2／8	米奥小学校	アーテックロボを活用した授業（6年理科）「ミニ信号機をつくろう」
2／26	七里小学校	アーテックロボを活用した授業（6年理科）「ミニ信号機をつくろう」
2／29	東又小	校内研参加（プログラミングの授業参観）
3／5	東又小	アーテックロボを活用した授業（6年理科）「ミニ信号機をつくろう」

2．学校への研究支援

（1）Q-U・hyper-QU の取り組み

【実施計画】

期　日	内　容	備　考
4月	校長・教頭合同会で実施のお願い	
4月	各学校の注文書の回収	全小中学校
5月・ 6月	全小中学校で１回目実施	全小中学校
8月	１回目の結果集計・所内会で共有	
10月・11月	全小中学校で２回目実施コンピュータ診断	全小中学校
1月	２回目の結果集計	
2月	所内会で共有・まとめ	

【目的・概要】

Ｑ－Ｕは、「やる気のあるクラスをつくるためのアンケート」と「いごこちのよいクラスにするためのアンケート」からなり、児童生徒の心を理解するための調査方法の一つである。また、「日常の行動をふり返るアンケート」の hyper-ＱＵを中学校に導入している。教師が児童生徒の個々の状態と学級の状態を理解するための客観的で多面的な資料となりうるものであり、また、学級集団づくりや児童生徒理解、教育実践の効果測定、不登校予防、いじめの発見・予防、学級崩壊の予防において活用され効果が期待できるものである。

本町が、Ｑ－Ｕに取り組み始めて １８年目を迎え、今年度も全小学校・中学校で実施することができた。

【成果と課題】

Ｑ－Ｕ・hyper-ＱＵの活用については、実施データを細かく分析し、全職員の資料として校内研修などでの活用や児童生徒の個人面談の資料とするなど、各学校での取り組みが継続されており、児童生徒理解につながっている。

教育研究所でも、実施データは簡易プロット表（コンピュータ診断の場合はデータ）を作成して蓄積し、町内の児童生徒の傾向を把握している。また、各校から出されたデータをもとに傾向を分析し、所内会で報告し、学校支援の一助となるように、職員間で情報の共有を行った。また、小学４年生以上の SNS 関係の集計結果については、少年補導センターとの全体会において情報共有を図った。ただ教育研究所では個人の特定はできないため、支援が必要な児童生徒が各学校での取り組みによってどのように変容したかについては把握ができていない。

【今後の取り組みについて】

現在四万十町では、東京書籍の学力定着状況調査を実施している。その東京書籍にも「i－check」というクラスづくりのための質問紙調査があり、それを合わせて実施すると、学力とのクロス集計も見ることができるということである。現在はどの学校でも児童生徒理解や学級集団づくりのためにＱ－Ｕ・hyper-ＱＵを活用しているが、QU と類似している他の質問調査もあるため、今後どのような形式で行うのがよいか検討していく必要がある。

（2）「いのちの学習」への支援

【実施内容】

○「いのちの学習」実施校

◆川口保育所　◆認定子ども園たのの　◆田野々小学校　◆昭和小学校

◆東又小学校　◆影野小学校　◆大正中学校

【目的・概要】

研究所では、「いのちの学習」に取り組む学校や保育所に、教材の貸し出しや授業への協力などの支援を行っている。

「いのちの学習」の目標は、

① いのちの大切さについて学ぶ。

② 友達の気持ちを考えることのできる共感性を育てる。

③ このプログラムを通して家族の絆を大切にする心を養う。

である。幼児期・児童期の早い時期にいのちの教育をすることで、いのちに関心を持ち、いのちを大切にしていく心を育てていこうとする取り組みである。

妊婦さんに協力してもらい、母親のお腹の中にいる赤ちゃんの心音を聞いたり、エコーの画像を見たり、赤ちゃんに触れ合うなどの体験的な活動と合わせて、家族から話を聞くことや絵本の読み聞かせや紙芝居、胎児人形、赤ちゃん人形等を使った学習も行っている。

【成果と課題】

「いのちの学習」に取り組むため、教材の利用を希望した学校については、養護教諭と事前に学習内容の打ち合わせを行い、授業の支援も行うことができた。授業を実施した学校の児童からは、「奇跡の連続の上に今の自分が存在していることが分かったから、今を大事に生きていきたいと思った」といった感想が聞かれ、「いのちの学習」を通して改めて自分や周りの人たちの命の大切さについて考える機会となったと思われる。課題としては、「いのちの学習」の様子を研究所便りで町内の小中学校に紹介し、より多くの学校で「いのちの学習」に取り組んでもらうよう呼びかけたが、「いのちの学習」を実施している学校が毎年一部の学校に限られていることが挙げられる。今後各校へと取り組みが広がるように、情報発信の仕方を考えていく必要がある。

【今後の取組案】

養護教諭に向けて「いのちの学習」について知ってもらう機会をつくったり、新たに「いのちの学習」に取り組みたい学校については、他校の取り組みや授業展開例を紹介したりして、実施につながるようなサポートを行っていきたい。

（3）校内研修支援

【実施時期】

影野小学校	6/28	校内研修（6年国語公開授業・研究協議・講話）
影野小学校	7/6	校内研修（2年国語公開授業・研究協議）
米奥小学校	9/6	校内研修（講師によるプログラミング授業参観・講話）
東又小学校	9/27	校内研修（6年特別活動公開授業・研究協議・講話）
昭和小学校	10/6	校内研修（1年国語公開授業・研究協議・講話）
東又小学校	2/29	校内研修（講師によるプログラミング授業参観）

○四万十町小小・小中連携教育推進協議会　5/11　7/11　11/6　2/15
○四万十町道徳教育推進協議会　6/20　2/20

【目的・概要】

本町の教育委員会では、校内研修を活性化するために校内研究支援事業を行い、学校独自で使える研修費の補助を行っている。そこで、研究所でも、各学校の校内研修に参加し、研修が活性化するように協力・支援を行っている。

基本的には、校内研修を公開している学校を中心に、ともに研究する仲間の一人として校内研修等に参加させていただくことにする。

【成果と課題】

参加した校内研修では、公開授業を参観したり、授業後の研究協議に参加したり、また講師による講話を聴くことができた。それによって、各校の取り組みを知ることができたり、新たな気づきもあったりして、今後の自身の授業実践に活かせる内容を学ぶことができた。

しかし本年度は4校の校内研修にしか参加することができなかった。校長会や研究所便りで、校内研修に参加させてほしい旨は伝えたものの、各校の校内研修の日程を把握することができず、学校の方からお知らせをいただいた校内研修にしか参加できなかった。来年度はこちらからもっと積極的に学校へ働きかけ、できるだけ多くの学校の校内研修に参加できるようにしたい。

【今後の取り組み案】

校内研修に参加し、各校の取り組み等について、情報発信もしていきたい。

影野小　校内研修

東又小　校内研修

３．教育支援センターの運営

【目的・概要】

◆諸事情（心理的・情緒的・身体的等の理由）により不登校状態に陥った児童・生徒に対して、相談及び個別指導、集団生活の指導・支援を行い、学校生活への復帰及び自立を図ることを目的とする。

◆義務教育終了後、進路が決定していない者等に対して、相談及び情報の提供、学習支援などを行い、社会への参加及び自立を図ることを目的とする。

◆教育支援センターでは以下の指導目標に基づいて、子どもの成長や課題に合わせて個別に支援を行い学校復帰を目指す。

（指導目標）

〇心の安定を図る

・教育支援センターが通室生にとって安心できる居場所となるように支援する。

〇規則正しい生活リズムを身につける

・教育支援センターに通室してくることで生活リズムが作られるように支援する。

〇他人の気持ちを考え、認め合うことができる

・人と関わったり、つながったりする楽しさを感じられるように支援する。

〇様々な活動を通して自信を持つことができる

・子どもたちそれぞれが自分の得意な分野での活動を通して自信を持つことができるように支援する。

【通室生の推移】A～D（かげつ入室願受領順）E（たのの・とおわ入室願受領順）

	A	B	C	D	E						
4月	通室届										
5月		通室届			通室届						
6月					通室						
7月					通室						
8月											
9月					通室						
10月					通室						
11月			通室届		通室						
12月			通室		通室						
1月			通室		通室						
2月			通室	通室届	通室						
3月			通室	通室	通室						

【本年度の活動の概要】

今年度前半は、通室生が定期的に利用することがなかったので、指導員が学校現場に支援に行くことが発生した。

年間行事予定により「かげつ」「たのの」「とおわ」の行事を行ってきたが、「かげつ」と「たのの」「とおわ」の交流はできなかった。３学期になって登山を実施し、２月の末に社会見学として桂浜に行ってきた。例年のように通室生とのつなぎのため、毎月１～２回「かげつ」に来てくれているSC（スクールカウンセラー　以後SCと記す）にも参加してもらった。

【次年度への課題】

「教育支援センター」では、本人・学校・SSW・保護者等と随時に相談しながら児童生徒の状況に応じた学校復帰や進路等について、全員が情報共有と支援方針の確認のもと支援にあたっている。（基本的に通室届が出た際に児童生徒の保護者・担任・SSW・指導員の会を持っている）さらに、月末には学校担当者（主に担任）との報告会を行っている。また、必要に応じ在籍校の教員に教育支援センターへの訪問を依頼し、面談や学習指導などの機会を設けることで、通室生の状況の共通理解を図っている。

通室している児童生徒は、学年はもちろんのこと生活リズムや学習の理解度、情緒的な不安定さなどの状況が異なっていることから個別対応の必要があり、指導員の勤務状況によっては人数的に十分な対応が難しい場面が多くある。また、常勤の指導員がいないため、引継ぎが難しい面もある。そのため、研究所の職員とも日頃より共通理解を図り、児童生徒に関わりを持ってもらい臨機応変に対応できる関係を築くなどの工夫をしている。

課題としては、

1） 母親と離れられない児童への対応の仕方について、指導員が手法を学び共通理解して当たること

2） 長期休業中に、不登校傾向の児童生徒へ新学期に向けた支援の充実

3） 支援センターへ通室届けが出されないまま不登校になっている児童生徒に対しての支援並びに各学校との連携

があげられる。

通室生は生活リズムの乱れから定期的な来室のリズムが整いにくい。来室することを目標と設定している通室生は学習の積み上げができず、復帰につながりづらい。好きなことや、興味のあることから始め来室のリズムをつくり、タブレットなども活用しながら徐々に学習に向かわせたい。支援センターは学校復帰だけを目的とするのではなく、子どもたちが支援センターの温かい雰囲気にふれ、エネルギーをためながら過ごせる居場所にしていきたいものである。

課題としては、

1）　母親と離れられない児童への対応の仕方について、指導員が手法を学び共通理解して当たること

2）　長期休業中に、不登校傾向の児童生徒へ新学期に向けた支援の充実

3）　支援センターへ通室届けが出されないまま不登校になっている児童生徒に対しての支援並びに各学校との連携

があげられる。

通室生は生活リズムの乱れから定期的な来室のリズムが整いにくい。来室することを目標と設定している通室生は学習の積み上げができず、復帰につながりづらい。好きなことや、興味のあることから始め来室のリズムをつくり、タブレットなども活用しながら徐々に学習に向かわせたい。支援センターは学校復帰だけを目的とするのではなく、子どもたちが支援センターの温かい雰囲気にふれ、エネルギーをためながら過ごせる居場所にしていきたいものである。

令和５年度 教育相談活動（SSW）等について

（窪川地域）

月	相　談	学校・保育所訪問	家庭訪問	その他	備　考
4月	11	14	2	45	
5月	8	9	1	53	
6月	20	8	6	41	
7月	7	10	7	48	
8月	5	5	1	36	
9月	20	11	0	52	
10月	11	11	5	38	
11月	13	9	0	35	
12月	14	7	0	31	
1月	9	2	0	39	
2月	11	6	1	74	
3月	6	7	0	11	
計	135	99	23	503	

（大正・十和地域）

月	相　談	学校・保育所訪問	家庭訪問	その他	備　考
4月	0	13	3	31	
5月	4	11	4	33	
6月	4	11	12	28	
7月	7	13	4	35	
8月	6	6	6	22	
9月	6	11	7	36	
10月	4	10	9	25	
11月	15	10	14	36	
12月	5	11	3	16	
1月	6	7	9	32	
2月	6	11	5	21	
3月	2	9	3	30	
計	65	123	79	345	

※　相談は、来所・電話相談を含む。

４．教育相談活動（ＳＳＷ）

【目的・概要】

児童生徒、保護者、学校、地域などからの相談を受け、学校だけでは対応が困難なケースに対して、環境への働きかけや調整を行い、福祉・医療などと結びつけることによって解決を図る。増加傾向にある不登校の子どもの支援にあたっては、家庭訪問を実施すると同時に、関係機関と連携して対応にあたる。また、さらに就学前の厳しい環境にある子どもや発達が気になる子どもについても、小学校へ円滑に入学できるよう、保育所や認定こども園（以下「保育所等」という。）、関係機関等と連携して、その子どもと保護者への支援を行う。

【活動内容】

・問題を抱える児童、生徒が置かれた環境への働きかけ
・関係各機関とのネットワークの構築、連携、調整
・保護者、教職員等に対する支援や相談、情報提供

【成果と課題】

・課題を抱えた児童、生徒について、学校や支援機関への情報提供を行い、調整を図ったうえで連携して支援することができた。
・発達特性のある子どもやその家族への支援については、本人や家族の困り感に対して環境調整をし、各関係機関と相談しながら支援を行うよう心掛けた。
・不登校の児童生徒については、学校との連絡会や支援会を重ね、保護者との信頼関係を構築する中で学校に繋げる支援を行った。登校できるようになった児童生徒もいるが、完全な学校復帰には至っていないケースが多い。
・ひきこもりや本人及び家族に課題のある児童生徒については、学校・健康福祉課・社会福祉協議会、若者サポートステーション等の関係機関とも連携を図り支援を行った。
・不登校児の保護者の公教育への考え方も多様化しており、学校に行きたくなければ行かなくてもよいという考えの強い家庭の登校支援は難しい面がある。
・就学前の子どもについては、定期的な保育所への訪問や保育士からの相談を受け、早期に子どもの課題を明らかにし、円滑に小学校へ繋げるように関係機関と連携を図った。

【今後の取り組み】

・不登校児を支援する場合、その課題は多様化・複雑化している。早急な課題解決は難しく長期にわたるケースが多い。学校との連携により、取り組みの方向性を確認しながら、未然の防止策を強固なものにしたい。
・家庭に課題のある児童生徒を支援するためには、保護者自身への働きかけが必要である。そのため、他機関との支援の共有、連携を充実させていく。

令和５年度 発達教育支援（ST）活動 等について

	学校数	実人数	参観	面談 挨拶	訓練	支援会	相談	検査	その他
4月	0	0	5	15		2	2		
5月	3	8	9	11	18	1	3	1	
6月	6	14	4	4	27		4		
7月	7	15	7	1	31	2	2		
8月	4	6	1		9				
9月	7	16			32	2	5		
10月	11	22	1		66	1	4		1
11月	10	20			57		1		
12月	10	21(3)			44	1			
1月	10	21(3)			44		1	1	2
2月	10	21(3)			54		2		
3月	10	21(3)		1	34	2	1		
合計			27	32	416	11	25	2	3

【目的・概要】

・発達障害や学習障害などで学習等に馴染めない児童生徒に対して、授業時間の一部取り出しや放課後の加力の時間等を使用し、言語訓練を行う。

・平仮名、片仮名、ローマ字の習得やコミュニケーションスキルの向上を支援する。

・授業への取り組みを促進できるように児童生徒のスキル向上を目指す。

・学校と連携し、特性を持った児童生徒への対応方法を提示することにより特性を持つ児童生徒への理解を促進する。

【活動内容】

学校へ出向き訓練を行う

知能検査等を実施し児童生徒に現状の説明

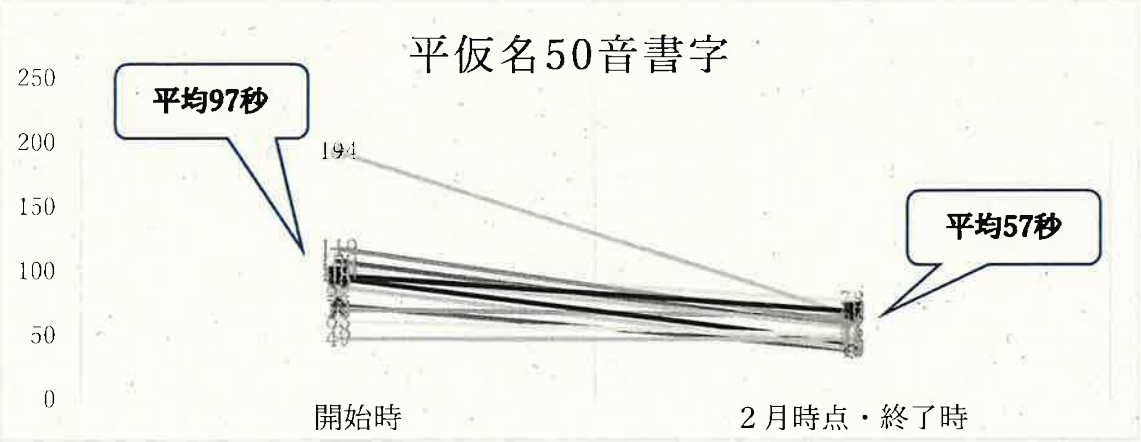
保護者に対して児童生徒の現状の説明

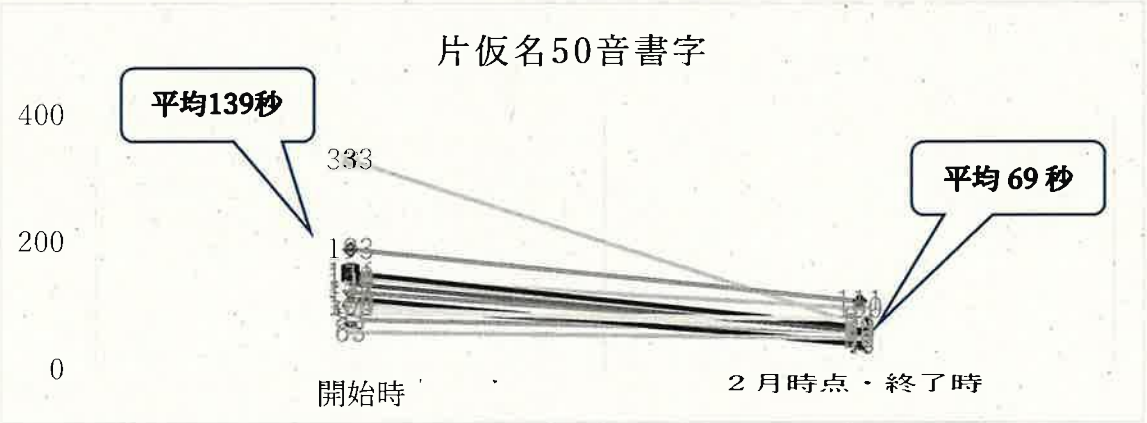
教職員に対する相談や支援

【成果と課題】

（成果）

・自閉スペクトラム症の１名は授業中に学習するという行為が定着し、語彙数が増加文レベルでの発話ができるようになった。タブレットを使用することで表出しづらい言葉や思いを補完しコミュニケーションが取れるようになった。





・読み書きが難しい児童生徒の平仮名、片仮名は定着していると思われる。
・成績の向上や、授業中の態度や集中力に変化が認められると学校より報告もある。
・担任の変更や不在時に訪問することで若干の不安軽減につながったのではないかと思われる。

（課題）

・実人数が 20 名程度となり、放課後や加力の時間を利用しての訪問を希望するため、訪問時間の調整が難しくなっている。
・窪川地区、大正地区、十和地区と訪問地域が広い。
・終了時期の基準や検討ができていなかった。

【今後の取り組み】

・訪問の継続
・学校との連携のために、児童生徒の状況を共有できるように、訓練時の変化を具体的に報告する。
・デイジー教科書の利用等の提案をしていく。

5．研究協力校の取り組み

【目的・概要】

教育研究所では、四万十町の教育振興及び児童・生徒の基礎学力の向上定着等、健全なる成長のために研究等を行う団体に対して、「研究協力校」として業務を委託している。

今年度は、以下にあげる２校を「研究協力校」として業務を委託した。

学校・団体名	研究業務	会長
昭和小学校 「チーム昭和」研究会	（１） 教科に関する研究	山本　千代 （昭和小校長）
十川中学校 「チーム十川中」研究会	（１）（８） 教科ならびに総合的な学習（キャリア教育）に関する研究	武田　博文 （十川中校長）

【実施内容】

◎昭和小学校

（１）教科に関する研究

研究テーマ	自ら進んで考え、ともに学び、表現し合う子どもの育成 ～根拠をもとに意見交換し、伝え合い深め合う力を育てる～
研究概要	【授業づくりの取組】 （１）授業改善 ①全国学力学習状況調査、県版学力定着状況調査、標準学力調査の分析 ②事実や根拠をもとに伝え合う授業研究 ③自分の考えを書く場の設定と振り返りの充実 ④外部講師を招聘しての研究・公開授業の実施 ⑤中部教育事務所『オンラインサマーセミナー』、『ウィンターセミナー』への参加 ⑥先進校の研究発表会への参加 （２）ICT スキルアップ ①ICT 担当による伝達講習と操作体験 ・ロイロノート、ジャムボード、コグトレオンライン、デジタルドリル、プログラミング等 ②県主催 ICT スキルアップ研修第１～第３回のいずれかを全員が受講 【帯タイム等を活用した取組】 （１）認知機能トレーニングとしてコグトレオンラインの実施・分析（６月～） （２）全校フリートークの実施（年間２回）

研究の成果○と課題●	○研究テーマに即して、全学級が講師を招聘し、研究・公開授業を行うことができた。また、年度当初の師範授業や夏休みの教材研究にも、講師の先生に来ていただいた。研究の方向性を整理、確認しながら研究を進めることにつながった。 ○「書くこと」に研究が絞り込まれ、それぞれの学年の系統性を学んだことにより、自分の学級ですべきことを明確にした授業づくりができた。 ○コグトレオンラインに今年度から初めて取り組み、児童も慣れることができた。途中、回答傾向の分析をし方法を見直したことで、実態に合った効果的な取組となった。 ○高知大学附属小学校の研究発表や江ノ口小学校の発表大会に数名ずつ参加し、実践から学ぶことで、自校の授業改善につなげることができた。 ○ICT を効果的に活用していくために、計画的に校内研修を実施することができた。操作体験では互いに学び合う姿が見られ、ICT 活用の気運が高まった。授業での活用にもつながっている。 ●「自ら進んで考え、ともに学び、表現し合う子ども」についての具体のイメージを、年度当初に明確にしておき全員が認識しておくことが必要であった。 ●行事や朝活動の際に、感想を言い合う時などに発表に対して消極的であったり、内容に対しての感想ではない発言もあったりすることから、まだまだ伝え合う活動に課題が見られる。 ●帯タイム・朝活動の内容については、あれもこれもではなく、優先すべき内容を精選するなどして取り組むようにしていきたい。 ●ICT を活用した場を多くするための教材研究や準備等の時間確保が課題となっている。また、タイピングスキルを向上させる取り組みも実施していきたい。

【実施内容】

◎十川中学校

（1）（8）教科ならびに総合的な学習（キャリア教育）に関する研究

研究テーマ	自ら学び、関わり合いを通して課題を解決していく力の育成 ～『株式会社のぼりん』（企業活動）の実施を柱としたキャリア学習の取り組みを通して～
研究の概要	企業活動に向けて ・株式会社のぼりんの維持、発展させることで、地域の活性化の一員を担う。 ・自分たちで起業することで郷土に思いをはせ、具体的に活動を起こしていく姿勢を育てる。 ・縦割りグループの活動を通して、これまで培われてきた学習方法や考え方等の良い面を引き継ぎ、活動をしていくことで、自主性を養う。 ・模擬会社の一員になることで、会社の仕組みを理解する。 1．オリエンテーション、製作、販売準備 2．販売活動（9月）

	３．講師招聘（１月）演題：「チャレンジした人にチャンスは訪れる」 高知ユニフォームセンター代表取締役社長　土佐かつお
研究の成果と課題	【成果】 １．オリエンテーション、製作、販売準備 本年度は、例年の商品（木工品、キーホルダー、布製品）に加え、新商品（４コマ漫画、バスボム、クッキー、花苗）の販売に取り組んだ。 ○全体的な売り上げは上がり、新製品では失敗したものもあったが、有意義な学習の機会となった。 ２．販売活動 本年度は、地域の協力のもと行っている地域学習『協働の川（総合的な学習）』の実施に合わせておこなった。また、どうすれば多くの人に買ってもらえるかについて、「全校特活（各学級→全校）」を設定し具体９作の話し合いの場を設定。 ○『協働の川』の活動に参加していただいた、一般の方にも販売活動について紹介できる、生徒にとって効果的な活動の機会となった。 ○「全校特活」ではチラシやポスターを作ってお知らせをすることとなった。大きな声で呼び込むなどもあがっていた。 ３．講師招聘（土佐かつおさん「チャレンジした人にチャンスは訪れる」） 本校の課題である、コミュニケーション力の育成に関して、タレントであり企業経営にも携わっている土佐かつおさんを講師に招聘しお話をしていただいた。「チャレンジした人にチャンスは訪れる」という演題の通り、自分から積極的に行動すること、交流しようとすることが大切であるということを、自らの経験をもとに楽しく、真剣にお話しいただいた。個々の生徒の心に強くのこった。 【課題】 十川中学校の生徒は、課題に対し、真面目に取り組もうとする生徒が多い。与えられた課題になると一所懸命に取り組むことができるが、より難しい課題に自ら取り組もうとする姿勢がまだ弱い生徒がいる。これからもっといろいろな人と関わり、コミュニケーション能力を高めることが必要である。

【成果と課題】

研究協力校になった学校は、実践を重ね研究が深まるなどの成果を上げている。

研究所としては、昭和小の校内研修に参加、十川中においては道の駅「とおわ」で行われた販売活動の様子を見せてもらうことができたが、研究については学校にお任せする形となり、年間を通して研究協力校と関わりをもつことはできなかった。また、研究協力校の実践の情報発信が十分できなかった。

【今後の取り組み案】

来年度は協力校とさらに連携を深められるように、授業等には積極的に参加をしていきたい。

６．副読本『わたしたちのまち　四万十町』の検証

【実施時期】

２月末から３月上旬　　アンケート実施（第３、４学年担当教員）

【目的・概要】

学習指導要領改訂により教科書が変わることを受けて、四万十町の社会科副読本『わたしたちのまち　四万十町』の全面改訂を令和元・２年度において行なった。

その後令和３年度には、副読本『わたしたちのまち　四万十町』をより効果的に使用してもらうよう、先生方の意見を集約し検証するべく、アンケートを実施し、副読本検証委員会を開催した。

令和４年度からは、引き続きアンケートをとり、結果を集約し検証することで、２年後の部分改訂の際の参考にしていくこととする。

【成果と課題】

四万十町の社会科副読本『わたしたちのまち　四万十町』が全面改訂されてから３年目となり、内容等を含めて現場の先生方の意見を集約するために、アンケートを実施した。「掲載されている写真や資料が古い」「ページ数が少ない」「副読本に準じたテストを作ってほしい」などたくさんの意見が出ているが、要望に沿えるものと沿えないものがあるため、難しいことについては現場の先生に伝え、理解を得る必要がある。

【今後の取り組み案】

これまでに実施したアンケートで出た意見を集約し、次回の部分改訂の際にはそれらの意見を可能な範囲で反映していくようにする。また、令和７年度には部分改訂に向けて編集作業に入るため、来年度中に編集委員のメンバーを集められるようにしたい。

副読本部分改訂までのスケジュール

令和３年度	令和４年度	令和５年度	令和６年度	令和７年度	令和８年度
改訂版発行			準備	部分改訂 編集作業	部分改訂 完成

７．四万十教科書センターの運営

【運営要項】

〇設置場所・・・・「四万十町農村環境改善センター」の一室

〇開室・休室及び閲覧時間

開室日・・・・・月曜日～金曜日

休室日・・・・・土・日曜日、祝祭日、12月29日～1月3日

閲覧時間・・・・午前9時～午後5時

〇貸し出し期間・・・10日間を限度とする（展示会開催期間中を除く）

〇教科書展示会・・・文部科学省の告示により決定

（今年度開催期間：令和5年6月14日～6月27日）

【目的・概要】

教育関係者の教科書研究の便宜や一般の方々への情報公開の一環として、平成24年1月4日より四万十町教育研究所で企画・運営・管理を行っている。

主な業務内容としては、 教科書の貸し出しと教科書展示会の開催である。今年度も昨年度に引き続き、年度初めの校長・教頭合同会において、研究所の業務の一環として「四万十教科書センター」の運営のことをお知らせした。

今年度の教科書展示会は、令和5年6月14日から2週間開催した。

【成果と課題】

今年度も、年度初めから各校に教科書の貸し出しについて周知を行い、教科書センターや研究所前にポスターを掲示するなどの工夫も行った。また、広報や研究所便りでも展示会開催等についての情報発信を行った。展示会の開催期間中には、教育関係者以外の閲覧もあった。

しかし、教科書の閲覧や貸し出し件数は少ないため、今後の情報発信にも工夫が必要だと思われる。

【今後の取り組み案】

来年度小学校の教科書が改訂となり、これまでと異なる出版社の教科書が採択された教科もあるため、年度末には現場の先生方から新しい教科書の貸し出し希望があった。令和7年度には中学校の教科書が改訂となるため、次年度に向けての準備のためにも教科書センターを活用してもらえるように、情報の発信をしていきたい。

教科書展示会の様子

8．その他の取り組み

（1）研修会

期　日	内　容	備　考
4月10日	高岡地区教育委員会連絡会「定例総会・部分総会」	須崎市民文化会館
5月11日	四万十町人権教育研究協議会窪川支部役員研修会	改善センター
5月24日	高知県教育研究所連絡協議会春季大会	オンライン
5月30日	第1回高知県教育研究所中西部地区連絡協議会	改善センター
5月31日	第1回教育支援センター連絡協議会	オンライン
5月31日	スクールソーシャルワーカー活用事業 第1回スクールソーシャルワーカー（就学前）研修会	高知県青少年の家
6月 2日	学び直し研修会	須崎市
6月12日	SCの活用状況把握のための教育支援センター来室	
6月14日	精神保健ネットワーク	
7月14日	高岡地教連教育支援部会	中土佐町
8月 2日	のぞみ教室視察研修	いの町
8月25日	SCによる教育支援センター研修会 ～学校とつながりにくい家庭へのアプローチ～	
9月 6日	ひきこもり支援検討会	須崎市
9月28日	高岡地教連教育支援部会	梼原町
10月 2日	教育支援センターブロック別研修会	オンライン
10月 5日	精神保健ネットワーク	
11月 5日	発達性協調運動障害（DCD）児への支援について	オンライン
11月22日	高知県教育研究所連絡協議会秋季大会	中土佐町
12月 9日	学校教育連携担当者連絡協議会	オンライン
12月16日	子どもシェルター開設記念シンポジウム ～子どもの命と心を守りたい～	福祉交流プラザ
12月18日	心の教育センター来室	
12月23日	第5回スクールソーシャルワーカーグループ学習会	心の教育センター
12月25日	放課後子ども教室指導員研修会	
1月26日	スクールソーシャルワーカー活用事業連絡協議会	高知県青少年の家
2月 7日	第2回教育支援センター連絡協議会	オンライン
2月 8日	精神保健ネットワーク	
2月13日	SCの活用状況把握のための教育支援センター来室	
2月16日	第2回高知県教育研究所中西部地区連絡協議会	改善センター
2月20日	高岡地教連教育支援部会	土佐市
2月29日	スクールソーシャルワーカー活用事業 第2回スクールソーシャルワーカー（就学前）研修会	教育センター

（2）所内会・全体会

【実施時期】

月・日	会の種別	場　所	月・日	会の種別	場　所
4/17	全体会・所内会	改善センター	11/7	全体会・所内会	改善センター
5/15	全体会・所内会	改善センター	12/12	全体会・所内会	改善センター
6/14	全体会・所内会	改善センター	1/24	全体会・所内会	改善センター
7/13	全体会・所内会	改善センター	2/21	全体会・所内会	改善センター
9/12	全体会・所内会	改善センター	3/21	全体会	改善センター
10/3	全体会・所内会	改善センター			

【目的・概要】

所内会では、教育支援センター、SSW、ST がかかわっている児童生徒の報告を行い、情報の共有化を図るとともに教育支援業務に対して検討を行う。所長が少年補導センター所長も兼ねており、少年補導センターを含む全体会と所内会を月１回開催している。

【成果と課題】

全体会、所内会ともに定期的に開催することができた。全体会で話し合う大まかな内容は、以下の通りである。

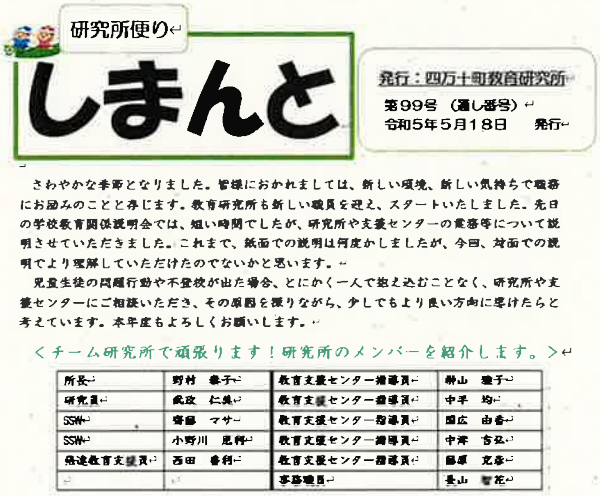
日程	全体会の流れ
9:30～10:30…少年補導センター所内会 10:30～11:00…全体会 11:00～12:00…研究所所内会 ※兼務である所長が全ての会に参加し、大正からの参加もあるため、できるだけ時間を有効に使えるように工夫している。	１．月行事の確認 ２．所内報告 ３．今後の取り組み ４．その他

所内会には、学校教育課支援担当職員も参加しており、支援の必要な児童生徒の情報を共有することができた。また、教育支援センターは場所が離れていることから、通室してくる児童生徒の様子や支援の状況を全体で把握し、共通認識を深めることができた。８月には、夏休み中の児童生徒の情報を共有する会を開催し、学校と連携しながら２学期の登校や支援がスムーズに行えるようにした。また、7月、12月、3月には教育長、教育次長、学校教育課課長も参加しての学期末業務報告会を行った。

【今後の取り組み案】

今後も月１回の所内会を原則とし、教育研究所の業務と教育支援センターの活動についての意見交換を行い、情報の共有化を図っていくこととする。また、情報共有だけで終わることがないように、様々な関係機関とつないだり連携したりしながら、支援の必要な児童生徒へ対応していけるようにする。

（３）教育研究所便り「しまんと」



研究所便り

しまんと

発行：四万十町教育研究所
第99号（通し番号）
令和5年5月18日　発行

さわやかな季節となりました。皆様におかれましては、新しい環境、新しい気持ちで職務にお励みのことと存じます。教育研究所も新しい職員を迎え、スタートいたしました。先日の学校教育関係説明会では、短い時間でしたが、研究所や支援センターの業務等について説明させていただきました。これまで、紙面での説明は何度かしましたが、今回、対面での説明でより理解していただけたのでないかと思います。

児童生徒の問題行動や不登校が出た場合、とにかく一人で抱え込むことなく、研究所や支援センターにご相談いただき、その原因を探りながら、少しでもより良い方向に導けたらと考えています。本年度もよろしくお願いします。

＜チーム研究所で頑張ります！研究所のメンバーを紹介します。＞

所長	野村　豊子	教育支援センター指導員	新山　雅子
研究員	武政　仁義	教育支援センター指導員	中平　均
SSW	齋藤　マサ	教育支援センター指導員	国広　由香
SSW	小野川　晃伸	教育支援センター指導員	中岸　吉弘
発達教育支援員	西田　春利	教育支援センター指導員	藤原　克彦
		事務職員	長山　智花

【実施時期】

第　99号	5月	１８日	発行
第１００号	7月	１９日	発行
第１０１号	9月	２５日	発行
第１０２号	１１月	２２日	発行
第１０３号	1月	２６日	発行
第１０４号	3月	発行予定	

【目的・概要】

教育支援センターの活動の報告や研究所の業務内容を中心とした通信とし、町内の教職員、教育研究所運営委員、教育委員、他市町村教育研究所に配布している。

また、研究所便りを通して、研究員による研究に係る情報発信も行っている。

昨年度より、研究所便りをホームページにアップし、研究所の活動内容を町民に皆様へも知ってもらえるようにしている。

【成果と課題】

学校に対しては、研究所便りの中で、児童生徒の問題行動や欠席が続くなどが出た場合、研究所や支援センターに連絡してほしいことや、教育相談・発達相談にも応じることを繰り返し伝えてきた。また、研究員の研究テーマであるICTの活用についても情報発信することができた。

研究所便りをホームページにも掲載はしたが、研究所の業務内容や相談業務について、保護者や地域への周知はまだまだ十分でないと考える。

【今後の取り組み案】

来年度も２ヶ月に１度研究所便りを発行していく。引き続き、先生方が児童生徒への対応に悩んだ時に連絡をいただけるように呼び掛けたり、各校の実践等を紹介するなど少しでも役立つ情報を発信したりできることに努めたい。

（4）えんぴつの持ち方教室

【実施時期】

4月25日	十川小学校　　昭和小学校
4月26日	北ノ川小学校　田野々小学校
4月27日	興津小学校
5月10日	影野小学校　　仁井田小学校
5月15日	東又小学校
5月18日	七里小学校
5月23日	窪川小学校
11月 1日	見付保育所
11月6日	川口保育所
11月7日	小鳩保育所
11月13日	ひかり保育所
11月14日	くぼかわ保育所
11月20日	松葉川保育所
11月27日	東又保育所

【目的・概要】

四万十町内の業者と個人の方のご厚意により、高知市の絵本の店コッコ・サンが考案した特別な鉛筆を寄贈していただいている。また、鉛筆の正しい持ち方を早いうちから身に付けることができるように、寄贈していただいた鉛筆を使用しての「えんぴつの持ち方教室」を１年生を対象に開催している。

昨年度から、入学前の年長児を対象にした持ち方教室（希望）も開催することとし、より早い段階で鉛筆の正しい持ち方を知る機会とする。

【成果と課題】

今年度は１年生の入学があった１０校で「えんぴつの持ち方教室」を開催した。教育研究所が日程調整やコッコ・サンとの連絡調整をしたり、学校に同行して鉛筆教室の支援を行ったりしたことで、学校にできるだけ負担をかけずに開催することができた。保育所での開催については、生涯学習課が担当しているが、年長児の教室も参観することができ、小学校入学前の子供の様子を知ることができた。

「えんぴつの持ち方教室」は１度だけなので、鉛筆の正しい持ち方については、各学校で継続して指導していくことが必要である。

【今後の取り組み案】

来年度も、入学してから早い段階での鉛筆の持ち方教室が開催できるように調整していきたい。

令和５年度 四万十町教育研究所スタッフ

所　　長　　野村　泰子
研 究 員　　武政　仁美
教育支援センター指導員
　　中平　均　　中津　吉弘
　　榊山　雅子　　藤原　克彦
　　国広　由香
スクールソーシャルワーカー
　　齋藤　マサ　　小野川　恵利
言語聴覚士　　西田　香利
事務職員　　長山　智花

令和５年３月３１日